

## シカゴすみれ幼稚園における教育の基本方針

幼児期の教育は、生涯にわたる教育の基礎となる重要なものです。文部科学省は、平成20年3月に「幼稚園教育要領」を改訂・告示し、今後の方向性を示しました。そこでは、幼児期を、「小学校以降の生活や学習の基盤を育成する時期」とし、生きる力の基礎を培う重要な期間と位置づけています。幼稚園での遊びと小学校の生活や学習との間には、一見、直接のつながりを見て取れないかもしれませんが、しかし、幼稚園では、遊びそのものを通して、小学校以降の生活や学習の基盤を育成しているのです。

現代の幼児を取り巻く社会の変化は急激で、その教育上の課題も指摘されており、幼児の生涯を見通した教育の充実が求められています。

幼児の実態については、体力や運動能力の低下、生活体験・自然体験の不足、人とかわる経験の不足等が懸念されています。これらは、幼児が生活する環境が変化し、発達に必要な体験が得にくくなっていることに起因する問題です。日本を離れ、シカゴでの限られた範囲を生活の場とする子どもたちにとっても、同様の実態があります。

幼児の発達を保証するために、「すみれ幼稚園」の教育はどうあるべきか、以下にその基本方針を述べます。

### 幼児期は成長のための「根」を育てる時期

幼児期は「根を育てる時期」といえます。これは、樹木にたとえての表現ですが、地中から豊かに養分を吸収し、その養分がしっかりした幹と豊かな枝や葉を育て、やがて強い風にも耐えられる根となるよう育てるのが、この時期の保育の要です。

ところで、この「根」は地中に静かに張っていくもので、外からは見えません。このことは、以下の二つのことを象徴しています。一つは、保護者や一部の保育関係者が、字が読めたりピアノが弾けたりといった目に見える側面の成果にともすれば強い関心をもち、身の回りの様々なことに興味をもって取り組むことや、友だちに対する思いやりといった心の育ち、すなわち、見えにくい側面を軽視しがちなことです。これから始まる長い期間にわたる成長や学びの観点からすれば、他の子より少し早い時期に文字が読めたり書けたりすることは、枝葉末節の事柄です。幼児期は、教えられて知識を身に付けていく時期というより、遊びながら自ら学んでいく時期です。いろいろな遊びを通して、さらにたくさんのかを学び身に付けていくのです。

もう一つは、私たち保育関係者には、そのような「根」にあたる部分、つまり心の部分で何が育っているのかを賢明に見抜く力、見極める力量が求められます。見えにくいために、何も育っていないのに育っているかのような錯覚に陥ってはならないし、その子にとっても周りの人々にとっても望ましいとはいえない根が育とうとしている場合、それを見逃してはならないのです。

### 1 戸外遊びの重視

子どもたちは大人の生活に影響を受け、夜型の生活を送る傾向にあります。しかも、ほとんどを室内で生活し、テレビを見たりゲームをしたりして、1日3時間程度は液晶画面を見つめている状態も珍しくありません。幼児期は、身体諸機能が著しく発達する時期であり、人間の一生を支える機能はほとんど幼児期につくられるといっても過言ではありません。そのような幼児期の特徴を考え、本園では、子どもたちが戸外で遊ぶ生活を意図的に取り入れています。

幼児期の戸外遊びは、毎日ドッチボールをしていれば安心というものではありません。しなやかに体を動かして活動するためには、様々な動きの経験が必要ですし、子ども自身が面白がって、自然に体を動かして遊ぶことが重要です。つまり、子どもの運動意欲を喚起するような環境づくりが大切です。幸い、本園には子どもが思い切り走り回れる広い園庭や、様々な動きが経験できる固定遊具など恵まれた施設があります。子ども自身が、これらに興味・関心をもってかかわり、習熟するまで遊び込むことが重要なのです。子どもの体づくりや体力づくり、運動能力の向上は、子ども自身が面白がって行う遊びによって促されるものです。

子どもの興味・関心を戸外に向けていくためには、教師自身が戸外遊びを楽しむ気持ちをもち続けて、積極的に子どもと一緒に遊ぶことが必要です。先生と一緒にかけっこをしたり、鬼ごっこをしたりするのは、子どもにとってたいへん楽しいことです。夢中になって遊ぶことで、自然に体を動かして遊ぶ楽しさを味わい、身体諸機能の発達が促されていきます。

## 2 自然体験の充実

子どもたちが現代生活の中で失ったものの一つとして、自然体験活動があります。自然との触れ合いは、子どもに命の大切さや自然の不思議さ、偉大さ、美しさに気づかせてくれる重要な体験です。しかし、子どもたちの身近には直接触れ合える自然環境が少なくなっており、比較的豊かな自然が残されているシカゴでも、実際の生活は自然と遠いものになっています。

「すみれ幼稚園」では、自然との触れ合いを重視し、園内の自然環境を豊かにしていくために、樹木や草花を植えたり、野菜を栽培したり、小動物を飼ったりしています。それらの世話を通して、動植物に愛情を感じ、それらが成長する喜びを味わったり、命の大切さに気づいたりできます。

また、それぞれの生き物の特徴や生き方を理解し、それらに適した世話の仕方、かかわり方を学ぶこともできます。教師自身が自然についての関心を深め、実際の保育の中で様々な世話をしながら、自らが愛情をもって生き物に接している姿を子どもたちに見せることも大切です。

園庭や園内に用意した自然は、意図的につくられた人工的な自然です。そこで、時には、地域にある自然環境との触れ合いを求めて、散歩や遠足に出かけます。見渡す限りの野原で飛び跳ねる虫を追いかけたり、畑でイモを掘ったり、山道を歩いたりする体験は、園庭でのそれとは規模が違い、子どもたちに自然の大きさや怖さ、危険などを学ばせることができます。この地域にある自然環境を十分に把握し、季節による変化も考慮しながら、子どもたちの発達に役立つ体験活動を実施していきます。

## 3 思考力の育成

幼児期は身体諸機能の発達が著しい時期ですが、知的好奇心も強く、ものの認知も進み、思考力の芽生えを培う重要な時期でもあります。国内の幼稚園の中には、早期教育を施し、小学校教育の先取りを行って算数や国語などの勉強をさせている場合もあります。

しかし、幼児期は体験や具体的な操作を通して学ぶ時期であり、知的好奇心をもって熱心に遊ぶことが、感じたり考えたりする力のもとになるものです。遊びは、子どもにとって学びの宝庫であり、小学校以降の学びの基盤となるものです。鬼ごっこをしてい

る幼児は、数量や空間を身体的に把握することを学べます。砂場で遊ぶ幼児は、水や砂、泥の性質、砂と水の関係などを理解します。また、こうした遊びは、様々な法則性の理解や数量の体験、不思議なことを発見する機会にもなります。さらに、道具の使い方を工夫したり、見通しを立てて考えたり、友だちとのかかわりの中でコミュニケーション能力を身に付けたりすることなど、遊びには様々な学びが含まれているのです。

一方、早期教育は、幼児の興味・関心を無視し、無理矢理勉強させる傾向が大きくなりやすいことから、幼児自身の学ぶ意欲を喪失させることにつながるとの指摘もあります。一時的に知識を覚えさせることを優先すれば、遊びの中で自ら学ぶ面白さを薄めてしまうことになりかねません。その場合、学びの質が高まらず、知的好奇心も刺激されないため、学びに対する意欲そのものが失われてしまいます。このような意欲の喪失が、小学校低学年の学習意欲の低下につながるとの報告もあります。

本校小学部の教師からは、「人の話をしっかり聴ける幼児を育ててほしい」との要望があります。確かに、学習に集中できない子どもは自分の遊びにも集中できない場合が多いものです。熱中して遊ぶ幼児の育成こそが、適切な小学校教育への導入になるものと確信します。

#### 4 幼児の学びを支える教師

子どもたちは、幼稚園での新しい生活に期待や不安を抱いています。彼らが安心して過ごせるよう、教師は一人一人に温かく接しています。温かいまなざしの中で、子どもたちは次第に幼稚園生活に慣れていきます。

教師は、一人一人の幼児を理解し、一緒に遊びながら、子どもの興味を広げたり深めたりして、さらに楽しめるようにします。また、すぐに手助けをすると、子ども自身が工夫したり友達と助け合ったりする機会が少なくなることもあるため、教師はすべてを手伝うのか、ヒントを与えるのか、自分たちで解決できるまで見守るのかなど、状況に応じて考えてかかわります。

遊びを通した学びには、人やものなど周りの環境が大切です。教師は、子どもが遊びから何を学ぶのかを予想し、子どもが思わずかかわりたくなるような教材を作成したり、一緒に遊んだりします。

かけがえのない子どもたちを教えはぐくみ、次世代に送り出していくことは、いつの時代にも変わることのない大人の責務です。「教育は人なり」との思いをもち、熱意をもって教育活動に取り組む教師が、子どもたちを全面的に支えます。